

ラオスの こども通信

85号
2023年6月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 図書室が学校にあるということ ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほitori「祭」 ▶ p.4

今号はインターンが書いた記事を中心にまとめられています。活動を支えてくれている彼・彼女らならではの眼差しによる記事をお楽しみください。



*写真の説明はp4をご覧ください。

図書室が学校にあるということ—インターンの図書室開設同行記

岡田龍之介(元インターン)

2023年2月、カムアン県の中高等学校3校での図書室開設に同行しました。カムアン県は首都ヴィエンチャンから車で9時間ほど離れたところにあります。この県にはタケークという主要都市があるのですが、今回の3校はそこからさらに1時間以上離れた郊外にありました。

東京事務所でのインターンを経て、ラオス事務所のインターンだった私の最大のミッション、それは日本のみなさんからいただいたサポートが図書室として子どもたちに届く瞬間を記録し、発信することでした。



図書室ボランティアの生徒たち

図書室開設は2日間で行います。初日は、ALC(ラオスのこども)が持ってきた絵本から教科書、図鑑まで様々な本を、1冊ずつ分類して蔵書を管理する台帳に記録していくという作業に始まり、先生や図書室ボランティアの生徒たちに図書室運営研修を受けてもらいます。作業は基本的に先生や生徒たちがすべて担当し、ALCスタッフはそのサポートをするという形で進めていきます。

印象的だったのは、本に登録印を押し、分類のシールを貼る作業

をしているときに、先生も生徒も作業中の本を読んでしまっただけで作業が進まないという嬉しい事件です。聞くと、「これまで教科書以外の本を読む機会があまりなかったので、どの本も気になってしまおう」と話してくれた生徒もいました。東京事務所でのインターンをしているときには活動紹介で何度も話していた内容でしたが、実際に本を手取る生徒や先生方の目の輝きを見て、初めて実感として理解できました。

蔵書の棚入れなどが終わったら、先生と有志による図書室ボランティアに図書室運営研修に参加してもらいます。図書室は生徒たちが中心になって運営していくので、貸出方法や備品の管理などについてALCスタッフがレクチャーします。先生も生徒も熱心にメモを取りながら聞いていて、貸出の練習などではお互いに教え合いながら手順を覚えていた姿が記憶に残っています。

1日目の終わりには図書室ボランティアたちだけに図書室を仮オープンし、「一足先に図書室で本を読んで帰ってもいいですよ」と言い終わる前にもう生徒たちは図書室に走り出していました。一冊借りて帰ってよいということになると、

「私のお気に入りにはカンパーとピーノイ(ラオスの伝統的民話)！」

「僕は大きなかぶかなー」

とそれぞれの1冊を見つけて、楽しそうに下校していきました。



棚入れ作業、つい、本の世界へ。いっしょの小さな妹も

そして2日目には、県や郡の教育局の方なども参加する開設式典を終えて、正式に図書室をオープンしました。式典のあとはレクリエーションを行います。紙芝居の読み聞かせや、折り紙絵本を使った折り紙教室など、図書室の本を活用したアクティビティです。私は当初、レクって楽しいラオスっぽくていいな、くらいに思っていたが、実はしっかりとした目的があります。

「いきなり『図書室を作ったので使ってください』と言われても、何があるのかもよくわからないので、まずは図書室が楽しい場所で、面白いものがたくさんあるところだと知ってもらうことが大切」とラオス事務所のチャンシーさんが教えてくれました。



折り紙絵本を使って、さっそく折り紙にチャレンジ

今回もたくさん生徒、そして先生もレクに参加して大盛況でした。それがひと段落する頃には、中等学校の校庭で遊んでいた近所の子どもたちも集まってきました。

ラオスでは小学校低学年だとまだ文字を読めない児童もいるのですが、絵本の動物の絵を眺めながら「これはサーン！（ラオス語で象）」と私に教えてくれたり、中学生の先輩に文字を教えてもらったりしていました。



中等学校の図書室に、近所の小学生もやってきた

ラオスでもスマートフォンが急速に普及している昨今ですが、こうして図書室が本に親しみ、先輩や後輩と交流ができる、人の集まる場所でもあることを実感すると同時に、学校に来るのが楽しみになってくれたらいいなと思いました。

「賛助会員会費」が寄付金控除の対象に

ラオスのこどもは認定NPO法人であり、当会へのご寄付は寄附金控除の対象となります。2022年の定款変更に伴い、これまでの一般寄付に加えて「賛助会員会費」も控除の対象となります。

年度会費：1口 5,000円(複数口の申込みも可)

会員期間 入会月から1年

詳しくは別添のチラシ、またはHPをご覧ください。



9つの小学校・中等学校で、新たに図書室を開設しました

2022～2023年、9校の学校図書室を開設しました。これによって、4,300人を超える児童生徒先生たちが図書を読むことができるようになりました。



本の楽しさを伝えるラオス事務所のバンロップ

【ヴィエンチャン県】

- 2022年9月20日:コーンケオ中等学校 (HA341)
- 2022年9月23日:ムアンキー中等学校 (HA342)
- 12月9日:67キロ文化学校 (HA345)
- 12月27日:ポンスーン小学校 (HA347)
- 12月29日:エークサーン小学校 (HA348)

【ヴィエンチャン都】

- 2023年1月11日:ポーサイ中等学校 (HA346)

【カムアン県】

- 2023年2月23日:ムアンカイ中等学校 (HA343)
- 2月25日:シヴィライ中等学校 (HA344)
- 2月28日:ナードン中等学校 (HA349)

*HA (Hak Arn): 当会が開設する図書室の愛称。ラオス語で「愛読」。

ご支援者: 福岡那の香ラインズクラブ、沖電気工業株式会社「OKI 愛の募金」、江川静英、「書き損じハガキ持ち寄りキャンペーン2021-2022」ご協力者の皆様(順不同、敬称略)

2021年度の書き損じハガキキャンペーンには目標を上回るご協力をいただき、5校の学校図書室を開設することができました。



図書室の本は、調べ学習、発表にと活用が広がります

目標を大きく超えました。書き損じハガキプロジェクト

2021年度に実施した書き損じハガキプロジェクトに続き、2022年度もインターン中心のチームがプロジェクト第2弾を実施しました。2021年度は学校図書館の開設を目標にたくさんお寄せいただき、今回は絵本『ドデカあたまのおぼけ』3,000部の出版を目指しました。

開始当初は苦戦したものの、期間を延長して実施したところ、2022年11月～2023年3月で、508人・団体の皆様からハガキ1万6,206枚、切手121万300円相当、総額約205万円相当の支援をいただきました。目標を大きく上回ることで、3,000部以上出版できることとなりました。ご支援、ご協力、ありがとうございます。

毎日新聞、熊本日日新聞、東京新聞、読売新聞(掲載順)の記者の皆様にも心より感謝申し上げます。新聞記事をきっかけに多くの方に会の活動やラオスの教育の現状について知っていただけたことも大きいと思います。皆様からの応援のお手紙も大変励みになりました。一部、ご紹介します。

・新聞の記事を拝見し、父の遺品でみつけたハガキや切手を寄付させていただきます。

ラオスのこどもたちが笑顔になる一助になればと願っています。熊本の新聞の記事を拝見しほんのわずかですが送らせていただきました。皆様のような活動が必ず世界のどこかで希望の灯となり未来につながっていくと確信しております。1人でも多くのラオスの子どもさんが喜んでくれることを心よりお祈りしています。

今後みなさんのお気持ちに応え、ラオスのこどもたちに読書の機会を届けられるよう活動していきます。(矢野みなみ、松田羽純/インターン)



はがきの入った封書がたくさん事務所に届きました

ラオスを満喫、ピーマイパーティ

ピーマイパーティを4月23日に行いました。インターンの私は初参加ですが、42回目の開催とのこと。コロナが明け、今年はパーシーの儀式が行われました。パーシーは主にラオ族によって行われ、結婚、誕生、就職、出家、歓迎、病気の治癒、葬式など人生の節目で催される伝統儀式です。祈祷師による祝詞の後、主役(例えば結婚式なら新郎新婦)に続いて参加者同士も手首に木綿糸を結び付けていきます。32個あると言われている魂を閉じ込めるという意味があり、健康や幸せ、繁栄などを祈りながらお互いに結び合うのです。

毎年おいしいと好評のラオス料理。日本ではなかなか食べられない麺料理のカオソーイもあり、私は大好きなのでとても興奮してしまいました! ラープという伝統的なサラダは、今回は牛のラープ・グアがふるまわれ、一番人気だったのでは。ラオス風焼き鳥のピンカイもすぐにお皿から消えました。ラオスのビール「ピアラオ」を片手にお食事しながら歓談するみなさんの様子は本当に楽しそうでした。



パーシーの儀式

物販・展示も行われました。ラオスの小物は刺繍が施されるなど細部にこだわって作られていて、とてもかわいいのです。初めてラオス語の本を見ました。ラオスの文化が反映されていてとても面白かったです。日本語からラオス語訳された本もあり、驚きました。

参加者は100人を超えました。私は前日と当日、準備に参加し、何をしたらよいか戸惑いましたが、ボランティアのみなさんの優しいサポートや素晴らしい連携のおかげでパーティを無事終えることができました。頭を柔軟にして臨機応変に動くこと、そして周りの方と意思疎通を図り、協力し合うことの大事さを実感し、これからの自身の成長へとつなげたいと思いました。私は大学でラオス語を専攻していますが、1学年10人ほどしかいません。ラオスと関わりのある方と話す機会は大学を除いてはあまりなく、今回、様々なお話が聞けてとても楽しかったです。来年度以降のピーマイパーティにも関わってみたいです。

(佐々木美咲/インターン)

「ラオスの手仕事 想像の動物」展で展示販売

3月29日～4月3日、京都、哲学の道の「桜谷町47」で「ラオスの手仕事 想像の動物」展と題し、ラオスで織られた布や服、刺しゅう小物などを展示販売しました。

桜が散りつつある哲学の道は多くの観光客でにぎわっていました。ウェディングフォトの撮影をしている方もちらほら。近くにお住まいで毎年来てくださる方、お知り合いの紹介で来てくださった方、たまたま通りがかり足を踏み入れてくださった方など、たくさんお越しいただきました。今回の収益はラオスの子どもたちと女性たちの支援に使わせていただきます。ありがとうございます。

3年ぶりに開催のラオスフェスティバルに参加

5月27～28日、東京・代々木公園でラオスフェスティバルが、コロナ禍を経て、3年ぶりに開催され、当会も出展しました。

ラオス語の図書を展示・販売しているのはここだけ! という強みで来場者の目を引き、スタッフ、ボランティアとの会話も弾み、購入していく方は想像以上の数でした。ラオスが好き、絵本に興味がある、たまたま代々木公園に来たら匂いと音につられて来てしまったなど。さらに、ラオスでビジネスを始めたく、従業員の子どもの保育施設をつくり、絵本をそろえたい。日本のラオス人の子どもたち向けのラオスの本があれば。という方などラオスへの多様なかかわりがあることにあらためて気づかされました。

屋外ステージでは、来日したラオスの人気ロックバンドの演奏に、来場者が熱く盛り上がりしていました。

「ラオスのこども」の仲間たち

ラオスの学校で1年間、先生を務めた

小野 崇さん(ボランティア)

私が教員をしている小学校の国際理解教室にいらしたチャンタソンさんからラオスの子ども達の様子を聞いた1997年、興味を持った私は個人的にスタディツアーのお誘いを受けました。1998年のスタディツアーには、学校で役目を終えた30mの綱引きロープをラオスに運び、みんなと種目を考えた手作り運動会では、たくさんの子どもの笑顔に出会えました。



2010年に家族でラオスを訪問

チャンタソンさんの活動とアイデアは多岐に渡り、一緒に何度もラオスへ足を運びました。子ども図書館の取材をするNHKチームの同行もきっかけとなり、1999年にはヴィエンチャン特別市(現・ヴィエンチャン都)教育局から学校に1年間来ないかとお誘いも受けました。スタディツアーで仲の良かった野崎君のエネルギーにも後押しされて、「やってみます!」と即答。一人ラオスに渡り、ラオスの学校で先生達と一緒にさまざまな授業をしてきました。新しいことを知る、学ぶことに対し、子どもだけでなく先生も目を輝かせ、見て、聞いてくれました。学ぶことが楽しいと思えるのは、素晴らしいことです。

当時、日本語を学びたいと自主的に集まった20人の中高大学生のうち数人は、ラオスの公務員となり、度々来日します。2年に1度は私もラオスに行き、友達や先生の家遊びに行ったり、サマースクールの授業をしたり、ラオスとの関わりは続いています。

「ラオスのこども」のお手伝いは細々と続けていますが、10年前からはピーマイパーティの調理ボランティアに毎年参加しています。スタディツアーで一緒だった妻と少し大きくなった2人の娘も参加し、ボランティアの皆さんと楽しく、美味しい料理を作っています。

20年前と比べ、日本もラオスも子ども達を取り巻く状況は大きく変わりました。IT化が進み、母語に限らず、インターネットで莫大な文字情報を得られます。しかし、子ども達が図書館で出会った本を手に取り、新しい世界を知る、本の世界に引き込まれる経験はとても大事です。民話や昔話などが出版物として残り、これからも読み続けられるように、会の活動が続く意味は大きいと思っています。

表紙の写真

カムアン県はムアンカイ中等学校の図書室、仮オープンの日、女の子が絵本を広げていました。聞けば「ボーン(小学1年生)」とのこと。手にしている絵本がお気に入りの様子。ウサギのミッフィーって言うんだよと教えてあげると「ガタイミッフィー」と言いながらずっとこの本をめくっていました。日本からラオス語の翻訳を貼り付けて送られた絵本「ちいさなうさこちゃん」(ディック・ブルーナー作、福音館書店)です。翌日の本オープンには、お友達を連れてきてくれて、スタッフは読み聞かせをしてあげました。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 85号

2023年6月発行 代表:チャンタソン・インタヴォン 編集人:森透
発行: Action with Lao Children / Deknoylao
(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alckt@deknoylao.net
http://deknoylao.net
都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494



2022冬募金ご報告とお礼 『リズムで学ぶラオス語』を出版

2022年12月から2023年3月まで、冬募金「みんなが、楽しくラオス語を学べるように。『リズムで学ぶラオス語』出版」を実施しました。約40人の方々から365,100円をご寄付いただきました。誠にありがとうございます。

『リズムで学ぶラオス語』は小学校で使われていた教科書を再編集したものです。その題の通り、子どもたちが楽しく学べるように、カラーのイラストとともにリズムカルな詩でラオス語を教える大人気の本です。

特定非営利活動法人地球の木からもご支援をいただけることが決まり、冬募金分と合わせて、3,000冊を出版できる見込みです。

メコンのほとり祭

ラオスのピーマイ

「花祭り」を保育園で祝っていた私は、ずっと長く、仏様の誕生日(4月8日)が、タイでもラオスでもミャンマーでも祝うピーマイとなっていると思っていました。ところが違うんですね。干支が一周し、新たな干支に入る時期を祝うのがこの祭りだ。(タイ国政府観光庁 Web)

ラオスでは一番暑い日が続くこの時期、これまで出向くことが出来ませんでしたが、今年初めて、ヴィエンチャンでのピーマイの水かけ祭りを楽しむことが出来ました。40度を超える暑さの中、お寺ではたくさんの人が仏像に水を掛け、清め、祈りを捧げています。

一方、街を車で走ると、あちこちから「バッシューン」とバケツの水が飛んできます。若い女性が荷台に乗っていると、なおさら。もちろん掛けられた方も大喜び。荷台から水を掛け戻し楽しんでます。私のような老人が運転している車は無視です。道路端からホースで水をかけ続けて



いる人も皆テンション高め。子どもたちは足元のビニールプールでバシャバシャ。そして歩く人に向け水鉄砲。

夜になると、中心街の何か所かで、ビール会社がステージを開き、大音響とともに、何百人の若者がビールの小瓶を片手にフロアで踊っています。みな、ショートパンツにタンクトップ。どうみても中高生の若さに見えます。ラオスの人は一般的にはおとなしく、もっとエネルギーがあっても思っている身にとって、全く違うエネルギーに満ちた空間です。こちらが本当の姿かもしれません。ズドンズドンというリズムに、聞いている私も身体が動いてしまいます。この心地よさ、いいですね!感動的です。

(野口朝夫/事務局長)